

2018年  
12月18日  
火曜日

# 関学の思ひ出

●退任教授最終チャペル講話／河野 正道 教授（理論経済学）

今回が私にとって最終のチャペルトークであり、私の関学での学生時代の思い出を話すのが適当かと思えます。当時の関学では、単位がもらえる授業としての大学の公式的なゼミとは別に、学生が自主的に開いている非公式ゼミ（勉強会）があちこちにありました。自分の大学時代を振り返ってみると、この二つのタイプのゼミからかなりの影響を受けていることがわかります。よって、当時の関学でのゼミについて語らせていただきます。まずは大学の公式的なゼミについてお話しします。

当時は、1年生から4年生まで毎年、ゼミがありました。1年次は人文演習であり、これは今の基礎演習

に相当するもので、語学の先生、キリスト教の先生が担当しました。2年次のゼミは英語経済書講読演習であり、これ以後のゼミは専門の先生が担当します。1、2年次の学生は機械的に割り振りされ、学生側の希望も考慮されません。3、4年次が研究演習であり、それは今と同様に学生の希望が考慮されます。現在と異なる点は、使用されるテキストは日本経済史のゼミも含めてすべてのゼミで英語であったという点です。1年生の時の人文演習は実存主義哲学の文学作品をテキストにしており、ケルケゴールなどを七転八倒しながら読みました。苦しみましたがあまり理解できませんでした。ま

た、議論に積極的に参加できず、ゼミそのものにもあまり興味は持てませんでした。そのため2年次のゼミでも当初は積極的な学生ではありませんでした。2年の英語経済書講読演習の1回目の授業はゼミの方針を説明し、発表者順を決めただけで終わりました。2回目から本格的にゼミに入った（と思われる）のですが、私は予習しないまま、のんびりムードで出席しました。すると担当のK教授は、「予習して来なかった者は出て行け」と明瞭におっしゃいました。半分ぐらいが出て行つたでしょうか、私も出て行きました。だから私は3回目からは真面目に予習をしていきました。おかげで400

ページからなる英語のテキスト、Meyers著『*Elements of Modern Economics*』を年間通して読み終えることができました。また、経済学の面白さも、学問的な議論することの楽しさも分りました。確かに、K先生のこの指導方法は荒療治でした。先生自身も危険を背負い込むことも十分に予想されたはずですが、あえてその危険を冒されたのです。事実、かなり後になってある学生が授業の中で、自分を追い出したことにクレイムをつけました。K先生はかなり困ったことであろうと思えました。このとき、多くの学生は、予習してこなかった我々が悪かったのだ、と思っていまし

た。(ただし、ひそひそ話で言うだけの、物言わぬ大衆、でした。)

確かにこのような荒唐治は成功するとは限らないでしょう。今ならパワハラと言われて終わってしまいそうです。これはチャペルでの講話でありますから、言わせて頂きますが、このK先生は熱心なキリスト者であり、学内の祈祷会ではいつも大きな声で祈っておられたとか。公の場でも私的な場でも、常に神に祈っておられたそうです。その祈りに神は応答され、このK先生を自らの道具として用いられたのだと思います。

もう一つ、今日お集りの学生さんたちに言いたいことがあります。私がかここで語りたいゼミは大学の公的な授業としてのゼミのみではなく、むしろ学生同士が自主的に開くゼミのことであり、そちらの方が学生には影響力(教育力)がより大きいのではないかと思えます。この2年の英語経済書講読演習のゼミの予習のために、同じゼミの学生たちとサブ

ゼミ(予習会)をしました。英語の専門書や数学的な専門書を独力で読解するのは難しいので、友達同士で互いに教え合って予習しました。しかし、なかなか互いに相手を説得するのは難しく、議論が収束しないことも数多くありました。誰か優秀なリーダーがいれば勉強会は効果的になるはずですが。そんなときに運よく大学院生が指導するゼミに入れてもらいました。そのきっかけは以下の通りです。

Nさんという当時大学院修士1年生の人が指導する研究会がありました。このNさんは学部学生3人ほどと(当時、喫茶店がこの経済学部の地下にあり、そのテーブルで、決してよい環境とは言えない騒音の中で)で読書会をしていました。当時は熊谷尚夫著、『現代経済学入門』を読んでいた。それを私が横から、うらやましそうに見ていました。するとNさんが「君も入るか」と誘ってくれました。「はいはい、入ります。」と二つ返事で答えまし

た。このように誰でも受け入れる人でした。6人目であったか、の参加希望者が現れたとき、幹事役の学生は、少人数で仲良く親睦を兼ねてやっているのに、第一椅子が足りない、という理由で断ろうとしました。しかしNさんは、断る理由がない、と受け入れました。そのために、新しい場所を探してさまよい回りました。というのは、当時は学生同士の自主的な研究会が非常に盛んであり、適当な教室はいつも満杯であったからです。

そのNさんのゼミでは、先にあげた熊谷の入門書から宮崎・伊東著『コンメンタール・ケインズ一般理論』、ヘンダーソン・クオント著『現代経済学』などの少し高度な専門書まで4年生まで続いて読んで行きました。この自主的なゼミと並行して公式的なゼミである研究演習Iが3年次から始まりました。研究演習は生田種雄教授が担当する経済成長理論のゼミを選びました。テキストは、経済学の専門雑誌に掲載された成長

理論に関する論文、つまり、原典を輪読する本格的なゼミでした。

Domar、Harrodのケインズ派の成長理論から始まり、Solowの新古典派の論文、"A Contribution to the Theory of Economic Growth"などの基本的な論文から複雑な成長理論の論文へと読み進めて行きました。ハロッド、ドーマーの理論では資本係数(資本÷生産量)と貯蓄率(貯蓄÷所得)で均整成長率が決まるということ、また、その成長経路が不安定(上あるいは下に少しでも乖離すれば元に戻らない)であることを知り、マクロ経済学の面白さを体験しました。

勉強とは一人では苦勞するものであり、適当な環境が必要です。私が大学院に進学し、研究を継続するようになったのは、公式、非公式なゼミを通じて、よい友人や先輩との交流が与えられた結果であることは間違いないはずです。